

## 良いことわざ、悪いことわざ

永野 恒雄

- ・福沢諭吉の翻訳道歌
- ・心学と禁欲的プロテスタンティズム
- ・明治期の和漢泰西俚諺集
- ・柳田國男のいう「悪いことわざ」
- ・藤井乙男の悪諺論

慶応義塾を創設した福沢諭吉が、ことわざに関して並々ならぬ関心を持っていたことは、ことわざ学会の例会等で指摘したことがある。

福沢は、フランクリンの「格言」に着目し、それを『童蒙教草』初編巻の一（一八七二）の第四章にある「風阿・里茶土が諺の事」の中で紹介している。これも、彼のことわざに対する関心の高さを物語るものと言えよう。

○朝寝する 狐は鳥に ありつけず

The sleeping fox catches no poultry.

○ねぶたくば 飽くまでねぶれ 棺のなか

There will be sleeping enough in the grave.

○早く寝ね 早く起きれば 知恵を増し 身は健やかに 家は繁昌

Early to bed and early to rise, makes a man healthy, wealthy and wise.

○飢えはよく 稼ぎの門を 窺へど 闕しきみを越えて 内にはいらず  
（「しきみ」は原ルビ、「しきみ」は「しきい」の古語である）

At the working man's house hunger looks in but dares not enter.

○人の寝る その間に深く 耕して 多く作りて 多く収めよ

Plough deep while sluggards sleep and you shall have corn to sell and to keep.

○今日といふ その今日の日に 働いて 今日の仕事を 明日に延ばすな

Have you somewhat to do tomorrow? Do it today.

○メリヤスを はめて道具を 扱ふな 袋の猫は 鼠とりえず

The cat in gloves catches no mice!

○滴したたりも 絶えねば石に 穴をあけ

Constant dropping wears away stones.

○一刻の 未来のほども 測られず いかで一時を あだに暮らさん

Since thou art not sure of a minute, throw not away an hour.

五七五、もしくは五七五七七という形で翻訳しているところに、福沢の才気があらわれている。このうち、五七五七七の形は、いわゆる「道歌」と呼ばれるもので、江戸後期の石門心学が、教化の手段として多用していたものである。もちろん福沢は、そのことを意識してこのような形での翻訳を試みているのである。

さて、石門心学というのは、江戸後期、次第にその実力を示しはじめた町人たち（主として商人）が、みずからの生業と生活の裏づけとするために求めた庶民哲学である。勤勉と節約を説くと同時に、利潤を追求する商行為を肯定するところに、その特徴があった。石門心学の教えは、マックス・ウェーバーが指摘した近代西欧における「禁欲的プロテスタンティズムの倫理」と共通するところが多い。

マックス・ウェーバーは、その代表作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904～1905）の中で、アメリカのベンジャミン・フランクリンに言及している。フランクリンの生き方と思想に、ウェーバーは「禁欲的プロテスタンティズムの倫理」の典型を見出したのである。

ということであれば、「禁欲的プロテスタンティズムの倫理」を示すフランクリンの「格言」を、石門心学を連想させる「道歌」の形で翻訳した福沢諭吉の思想的センスに、今さらながら敬服するのである。

ところで、1890年（明治23）に出された葦花園主人編訳の『和漢泰西俚諺集』という本がある。これは、西洋の格言・ことわざ、中国の故事成語、日本のことわざを並列する形で紹介した本で、非常に類書が多い。こうした本の存在が象徴しているように、明治期の日本においては、日本の「俚諺」が、西洋の格言・ことわざや中国の故事成語と肩を並べうる存在として扱われることになった。

それが、日本の「ことわざ」にとって、喜ばしいことであつたかどうかは別として、ともかく、日本の「ことわざ」は、にわかにならば高尚で文化的な短文句としての地位を占めることになった。

民俗学者の柳田國男は、昭和初年以降、ことわざについての論考を発表してゆくが、彼の「ことわざ」観には、つねに一定の道德意識がつきまとっていた。いわく「悪いことわざ」、いわく「下品なことわざ」。そうした柳田のことわざ観のよってきたところは、明治期、日本のことわざが、西洋の格言・ことわざや中国の故事成語に匹敵しうる存在として位置づけられてしまったという事態だったのであるまいか。

なお最後に、藤井乙男がその著『俗諺論』（1906）の中で展開した「悪諺」論に触れる。